

どうとくのひろば

No.
43

こころのひろば ---2

〔寄稿〕
不登校の現状と多様な支援
伊藤 美奈子

見てわかる! 道徳 ---4

「真理の探究」(小学校)
「個性の伸長」(小学校)
「希望と勇気、努力と強い意志」(小学校)
越智 貢、奥田 秀巳、上村 崇

実践事例 小学校4年 ---6
教師の明確な意図に基づく
道徳科の授業づくり
杉山 夏実、山本 洋

実践事例 中学校1年 ---10
「違いの価値」を見つめ、
多様性を磨き合う授業づくり
岩崎 佳子、島 恒生

おさえておきたい! 授業力アップのための
教科書・指導書活用術 小学校編 ---14
指導書を活用した道徳科の授業づくり
—指導書を「なぞる」から「使いこなす」へ—
山田 沙季

地球の仲間からのメッセージ ---15
想定外の羽化
長瀬 健二郎



表紙イラスト Kasumi Taoka

日文のWebサイト

日文 🔍



※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。



《寄稿》

不登校の現状と多様な支援

いとう みなこ
伊藤 美奈子 神戸女子大学教授

専門は臨床心理学(教育臨床)。公認心理師・臨床心理士。不登校・いじめ・思春期支援の研究や学校での相談活動に長年携わる。現在、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会不登校児童生徒に係る特別的教育課程ワーキンググループの主査を務める。



不登校の変遷

令和6年度の文部科学省調査によると、不登校の小・中学生は35万人を超え、過去最高を更新した。図1に示したように、コロナ禍以降、急激に増加してきた傾向にはややかげりが見られ、新規不登校数の増加には歯止めがかかったとも言われている。しかし、学年ごとの増加率をみると、もともと不登校数が少なかった小学校低学年で増加傾向が強まり、低年齢化が指摘されるところである。

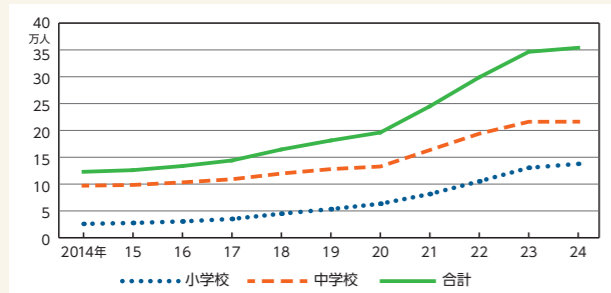


図1 小・中学校における不登校の児童生徒数の推移
(「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」より作図)

不登校の人数については、ここ10年以上増え続けているが、その一方で質的には、不登校の多様化が指摘されている。今に至るまで不登校の背景には、いじめや虐待、ヤングケアラー、性別違和、LGBTQなど、ますます多様な背景要因が絡み、「待つこと」が逆効果になりうるケース(=待ってはいけないケース)も増加している。こうした多様化に対し、重視されるのが「アセスメント」という視点である。不登校の児童生徒一人ひとりの個別性に注目し、その背景要因に目を向ける(見立てる)ことで、個々に合った関わりを考えようという方針である。

アセスメントと「チーム学校」

このアセスメントからスタートするという方向性は、支援の実際(手立て)を考える際にも必要不可欠なものである。ところで、アセスメントとは、「見立て」「査定」等と訳されるが、対象となる子どもを深く理

解するということである。その際、不登校の「原因探し」をするのではなく、子どもの状態・背景・強み・環境との相互作用を総合的に捉えるという点が重視される。さらに、個人要因だけでなく、学級(学校)・家庭・地域といった環境要因を含めて理解すると同時に、継続的で縦断的なプロセスを重視した理解の在り方が求められることになる。

このアセスメントの一つとして、『生徒指導提要』にも紹介されているのが、BPS(Bio-Psycho-Social Model)モデルである。このモデルでは、子どもの問題や困難を単一の原因や個人の資質や性格のみに帰するのではなく、複数の要因が相互に関連して生じているものとして捉える視点が示されている。具体的には、心身の健康状態や発達段階や特性を含む<生物的要因(B)>、感情の安定性や不安や緊張、認知の偏りやストレス対処の仕方を含む<心理的要因(P)>、学校や家庭での人間関係や地域社会との関係性を含む<社会的要因(S)>という3つの要素から個々のケースを捉え、この3側面が重なり合いつつ、環境との関係も含めて理解するという視点である。

このように考えると、アセスメントは容易ではなく、子どもを深く理解するためには専門的な視点が必要となることが分かる。担任教師が1人で行うだけでなく、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーのような多職種も含めたチームで理解する在り方が大切であると言える。2015年には、このような在り方を「チーム学校」「チーム支援」と称し、今に至るまで1人で抱え込まずに連携を重視する指導体制が求められるようになった。

不登校の背景要因

ここで、不登校に視点を戻し、アセスメントの一要素であるきっかけ(原因)について考えてみたい。不登校のきっかけについては、文部科学省が公表している「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課

題に関する調査結果」(以下「問題行動・不登校調査」)で、結果が報告されている。2020年の調査によると、学校(教師)が考える不登校のきっかけの第1位は、小・中学校ともに「無気力・不安」、続いて小学校は「親子の関わり方」、中学では「いじめを除く友人関係をめぐる問題」となっている。とりわけ最も多い「無気力」については、無気力になることで不登校になるのか、それとも不登校の状態像の一つとして無気力になっているのか、という議論もあり、きっかけを示す選択肢としては見直しが進められてきた。

これらの調査結果が学校による回答であるのに対し、子ども自身の回答はどうであろうか。同じく文部科学省による「不登校児童生徒の実態調査」(以下、「実態調査」)では、2020年、前年度に不登校であった小学6年生と中学2年生に調査した結果、<最初に行きづらかったきっかけ>として上位に位置づいていた項目としては、小学6年生では、1位が「先生のこと」、2位は「身体の不調」、3位に「生活リズムの乱れ」と続く。中学2年生では、1位が「身体の不調」、2位は「勉強が分からない」、3位に「先生のこと」となっている。

これらを比べると、先に挙げた「問題行動・不登校調査」が択一回答であるのに対し、「実態調査」では複数回答であることも影響しているが、その点を考慮しても、両者の調査結果が大きく異なっていることは明らかであろう。特に「教師との関係」については、「問題行動・不登校調査」での回答が非常に少ないことを考えると、学校側からは、学校や教師に関わる要因は見えにくい一方で、家庭のことや本人の個人的な要因に目がいってしまうという傾向が強いと言えるのである。

このように、不登校のきっかけ一つとっても、その状態をアセスメントする(見立てる・見極める)ことは非常に難しいことが分かる。しかも、このアセスメントを誤ると、対応や関わりにもずれが生じる危険性がある。難しいからこそ、担任1人で抱え込むのではなく、多職種とともにチームでアセスメントに取り組む姿勢が必要であるといえよう。

この、多職種のチームでアセスメントする場の一つが、「ケース会議」であろう。ケース会議には、当該児童生徒の担任だけでなく、生徒指導担当や養護教諭、教育コーディネーター、内容次第では管理職等、関係する教員に加え、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等も参加する。その目的は、多角的に当該児童生徒を理解し、次の一歩(具体的な支援)を考えることとされる。

不登校に対する支援の方針

多様化する不登校の現状を受け、不登校についての考え方を大きく転換する契機となったのが、2016年公布の「教育機会確保法」(以下、「確保法」)である。

この「確保法」によると、「不登校というだけで問題行動であると受け取られないよう配慮」することが明記され、学校復帰が全てではなく、学校に行かない生き方を認めようという方向性が盛り込まれた。さらに、学校外にも多様な学びの機会が保障され、その後に出されたCOCOLOプランにおいても教育支援センターやフリースクール、学びの多様化学校等の学校外の居場所を増やす方針が明確に打ち出された。

このように居場所の選択肢は確実に増えている。しかし、図2に示すように、コロナ禍以降の不登校の児童生徒数の急激な伸びに、居場所の数が追いついていないのも事実である。さらに、地域格差も大きい。今後、個々の状況やニーズに合わせ、ベストな選択ができるような取り組みが望まれる。

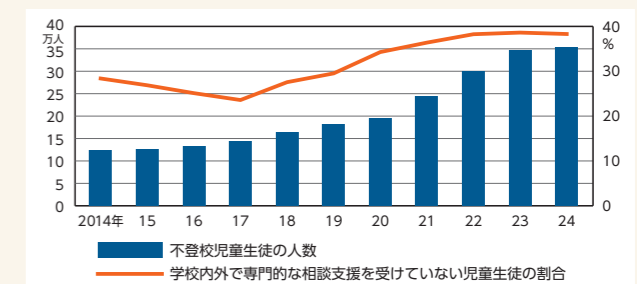


図2 不登校の児童生徒数と学校内外で支援を受けていない児童生徒の割合の推移
(「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」より作図)

最後に

不登校への支援の目標は、将来、児童生徒が社会的自立を果たすことにある。そのため、不登校の児童生徒への支援は、学校に復帰するという結果のみを目指すのではなく、児童生徒が自らの進路を、希望をもって考えられるように支援を行うことが必要となる。社会的自立に至る過程は多様で、中学3年生の場合、在籍中学校への復帰もあるが、学びの多様化学校に転校する道もある。高等学校に進学する際も、全日制高校に加え、定時制高校や通信制高校など新しいタイプの学校が多様にある。さらには、就職や高等学校卒業程度認定試験を受けて大学に行くという道もある。このように、一口に社会的自立といっても個々の児童生徒に求められる姿は実に多様であるため、学校復帰を形だけ整えるのではなく、個に応じた「自立」(SOSを発信できるのも、自らの過剰適応に気づき頑張りすぎない生き方を選択するのも自立の一つである)に向け、今後も幅の広い支援が必要とされる。

道徳の学習における応用編です。基本となる22の内容項目は、それぞれ独立しているわけではありません。それらは密接に関わり合い、また競合する場合があります。ここでは、内容項目間の関係を分かりやすく解説し、道徳的価値の本質やおもしろさに迫ります。

監修：広島大学名誉教授 越智 貢 共著：北海道教育大学准教授 奥田 秀巳
福山平成大学教授 上村 崇

今回のテーマ

- 「真理の探究」(小学校)
- 「個性の伸長」(小学校)
- 「希望と勇気、努力と強い意志」(小学校)

今回の「真理の探究」「個性の伸長」「希望と勇気、努力と強い意志」の組み合わせは、読者からのリクエストによるものです。

「見てわかる！ 道徳」では取り上げる内容項目を募集中です！

取り上げてほしい内容項目があれば、右の二次元コードからご応募ください。



「真理の探究」

小学校の先生から「真理の探究」の授業を巡る質問が届きました。そこには2つの悩みが書かれていました。一つは、「真理の探究」は「個性の伸長」や「希望と勇気、努力と強い意志」と関わりが深いため、それらを併せて探究しようとする、かえって「真理の探究」の独自性が伝わらなくなってしまうという悩みであり、いま一つは「真理の探究」には個人的な理由で探究する場合や社会のために探究する場合が考えられるため、個人や社会に関わる内容項目を取り上げざるをえず、その結果、同じく「真理の探究」の独自性があいまいになってしまうという悩みです。

他の多くの先生方もこの種の悩みを共有しているのでしょうか。そうだとしたら大変です。今回、この質問を取り上げたゆえんです。

真理を探究することの意味

おそらく質問者が構想しているのは、強い意志のもとで真理を追究し続けることによりその人の個性が形

作られるという場面なのでしょう。そうした読み物教材は、ガリレオ・ガリレイの例のように珍しくありません。しかし、その場合看過してならないのは、どのような真理がどのような状況下でどのように探究されたかという点です。ガリレイは、天動説が当然とされる世の中で、地動説の真理を訴えたために、強い意志や個性そして勇気を必要としましたが、真理を探究した人たちが全てガリレイと同じだったわけではありません。つまり、「真理の探究」と「個性の伸長」と「希望と勇気、努力と強い意志」という組み合わせは決して必然のものではないのです。

そもそも真理を探究することはとても限定された営みです。真理は、一般に、ある主張内容が客観的な事実と合致していることを指して語られます。それゆえ、真偽を客観的に問えないものを探求することは真理の探究とは言えません。主観的な好みに関わるもの、例えば、どの料理が最も美味しいかを客観的に探究することなどできません。さらに、この時代だけに当てはまる真理や私だけの真理を探究することも、厳密な意味では真理の探究の名に値するものではありません。

こうした点を理解するだけでも、真理の探究の独自性は明らかでしょう。真理の探究は客観的な事実

を見据えるという条件下でしか語れない営みだからです。いや、独自性はそれだけにとどまりません。

探究してはならない真理

質問者が述べるように、「真理の探究」には個人的な理由で探究する場合や社会のために探究する場合があるでしょう。この探究の動機という視点は質問者の意図以上に重要です。なぜなら、悪しき真理と呼ぶる真理も存在するからです。

真理は発見されるものですが、つねに善き真理だけが発見されるとは限りません。核分裂に関する真理は、原子力発電所を稼働させることができる一方で、核兵器をつくることも可能にします。つまり、真理は、多くの場合、諸刃の剣となりうる性格をもっています。しかし、サリンの作成に関する理論のように大量殺人にしか役立たない真理もないではありません。人類の不幸につながるこの種の真理の探究は、個人的あるいは社会的観点から、「道徳的に」禁欲・断念すべきではないかという問題を私たちに突きつけています。

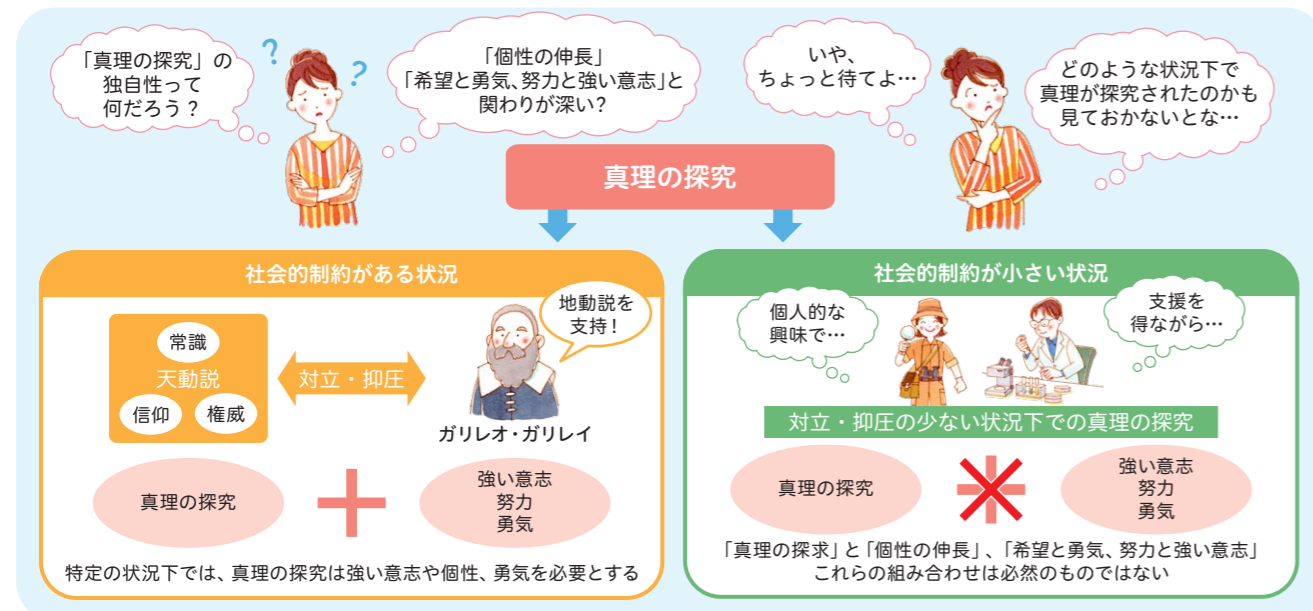
道徳を学ぶ必要性

以上は「真理の探究」に関する道徳の授業を考える際に不可欠な基本的内容です。それらを考慮せず、表面的な授業をすれば、かえって子どもたちを混乱させることになりかねません。

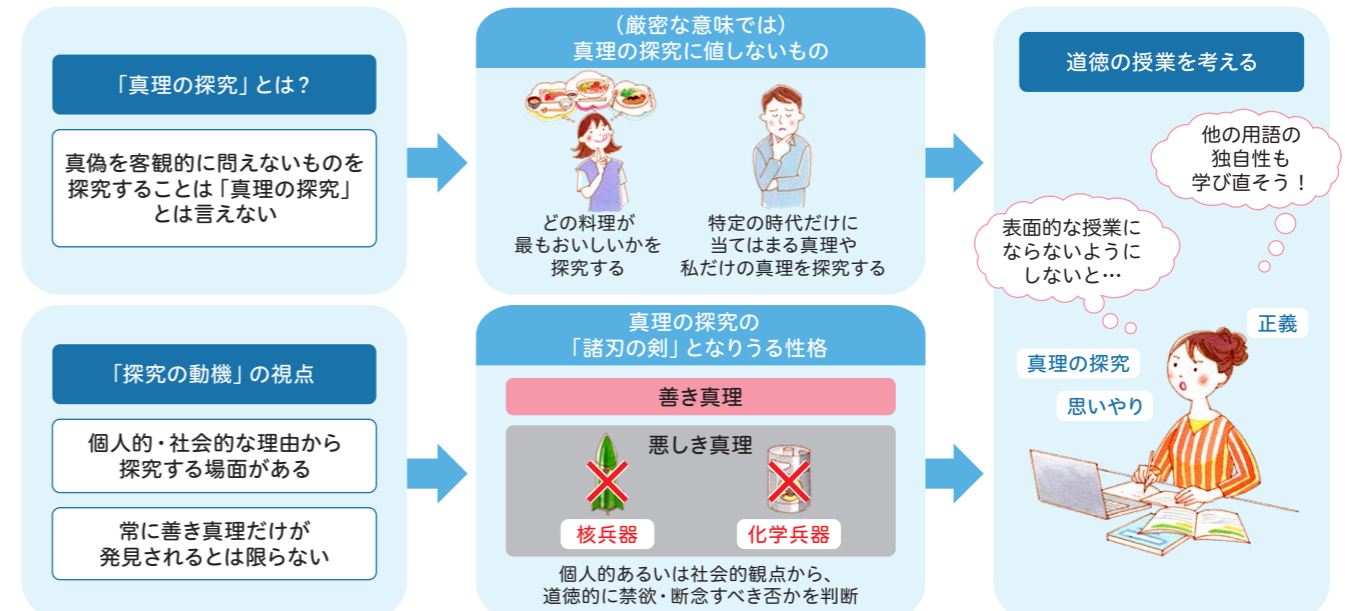
内容項目には「真理を大切にし、物事を探究しようとする心をもつこと」という文言しかありませんが、ここで語られる真理がどのようなものであり、その真理のどのような探究が想定されているのかということは、授業に先立って、教師それぞれがあらかじめ考えておくべき事柄です。でなければ不勉強のそしりを免れません。

むしろ、これは真理の探究だけの問題ではありません。それ以外の用語にもそれぞれ考慮すべき独自性があることを忘れてはならないでしょう。しばしば授業で取り上げられる「思いやり」や「正義」など、身近な用語についても、今一度それらの独自性を学び直しておくべきでしょう。

「真理の探究」と「個性の伸長」、「希望と勇気、努力と強い意志」の組み合わせ



「真理の探究」の独自性と、道徳の授業を考えること



小学校
4年

教師の明確な意図に基づく 道徳科の授業づくり

東京都大田区立久原小学校 杉山 夏実



教材名 「絵はがきと切手」

内容項目 B「友情、信頼」

主題名 友情を深める

ねらい 友達と互いの気持ちや考えを理解し合い、信頼し合うことで、友達とのよりよい関係を深めていこうとする心情を育てる。

教材あらすじ ひろ子のもとに転校した友達から絵はがきが届く。しかし、その絵はがきは規定のサイズを超えていたため、貼ってある切手の料金が不足していた。ひろ子はそのことを友達に伝えるべきか、兄と母に相談する。ひろ子は悩むが、友達だからこそ伝えることを選択し、返事を書く。

1 はじめに

道徳科では、道徳教育の目標に基づき、各教科等における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的かつ発展的な指導を通して道徳性を養うことをねらいとしている。道徳科で育成される道徳性は、児童が将来、人間としてよりよく生きることや、さまざまな課題に適切に対応することといった個人の在り方に関わるものであり、他者と比較して評価できるものではない。そのため、評価においては、児童の学習状況や道徳性の成長の様子を、記述によって捉えることとされている。適切な評価を行うためには、教師が明確な指導観をもち、1単位時間の授業において、期待する児童の姿を明確にした指導計画を立てることが重要である。

そこで本実践では、明確な意図をもった学習計画の作成と実践を通して、児童の道徳性を育む授業づくりを目指した。

2 ねらいとする道徳的価値について

児童にとって友達は、家族以外で特に深い関わりをもつ存在である。また、友達関係は、共に学び合ったり、遊んだりする中で、影響し合いながら築かれていく。友達の存在は、人格の形成にも大きく寄与すると

されている。「友情」とは、友達同士が互いの立場を尊重し、思いやる心である。

児童にとって友達関係は、最も重要な人間関係の1つであり、その在り方によって学校生活が充実するかが左右されることも少なくない。友達同士がなぐさめ合ったり、かばい合ったりすることに加え、ときには叱咤^{しつ}激励し合いながら、互いに人間性を高めていくことも大切である。

中学年の段階では、活動範囲の広がりによって集団との関わりが増え、友達関係もより広がっていく。一方で、自分の利害にこだわることから、友達とのトラブルが生じることも少なくない。友達の言動に対して是々非々で向き合い、問題があると感じた際には、相手を思いやりながら適切に忠告できる力を育てることが必要である。

「友情、信頼」の指導にあたっては、友達を信用し、信頼し合って、友情を深めるよさを実感させることを重視し、全教育活動を通して指導を行っている。特に「体育科」や「総合的な学習の時間」などでは、主にグループ学習の中で、友達を信用し、信頼し合って、友情を深めるよさについて考える機会を設定している。そこで、本実践ではその中でも「信頼」の価値理解を深めるために、「深化」を意図した指導を行った。

3 実際の指導について

(1) 導入の場面

導入では、児童が問題意識をもって学習に取り組め

友達がいてよかったと思ったのは、どんなときですか。

- ・一人で不安なときにいつでも声をかけてくれたとき
- ・自分が転んだとき、けがをしたときに助けてくれたこと
- ・クラス替えの初日のときに友達がいてよかったと思いました
- ・落ちこんでいたときに声を掛けてくれた
- ・手伝ってもらったとき
- ・何をすればよいか分からないときか教えてくれる
- ・不安だったとき
- ・分からない問題を一緒にやってくれたとき



るよう、事前アンケートを基に友達との関係を振り返らせ、その結果を全体に共有した。自分との関わりから「友情、信頼」を想起させ、「『友情を深める』とは、どういうことでしょうか。」という本時の学習問題に結び付けた。

(2) 教材提示の場面

教材提示では、児童が登場人物に自我関与して考えを深められるよう、スライドを使った読み聞かせを行った。視覚と聴覚いずれかの情報処理が優位な児童にも対応できるよう、スライドには場面絵とせりふの吹き出しを配置したものを提示した。さらに物語の世界に入り込みやすくするために、BGMを流しながら教材提示を行った。

(3) 役割演技の場面

基本発問では、ねらいとする道徳的価値に迫るため、葛藤する二つの自我に分かれて話し合う役割演技を取り入れた。「料金不足を伝えるひろ子」と「料金不足を伝えないひろ子」に分かれて話し合うことにより、「友達のためには言ったほうがよい。」という友達を信じる気持ちと、「友達に嫌われたくないから言えない。」という友達を信じ切ることの難しさの間で葛藤する話し合いとなった。

本学級は話し合い活動に前向きな児童が多いので、先にトリオ（伝えるひろ子、伝えないひろ子、その会



話を客観的に聞く人)に分かれて話し合い、その後、トリオで役割演技をし、「友情、信頼」の価値理解を深める話し合いを行った。

(4) 中心発問の場面

本実践で最も考えさせたいことは、「友達を信用し、信頼し合って、友情を深めるよさ」である。そこで、ひろ子が正子を信用、信頼して手紙を書く場面を中心発問として取り上げ、ねらいとする道徳的価値について、多面的・多角的に考えられるようにした。その時の授業の様子を紹介する。(一部抜粋)

- T** 正子さんに手紙を書き始めたとき、ひろ子はどんな気持ちだったでしょう。
- C** 正子さんなら許してくれる。分かってくれる。
- C** 私も行ってみよう。正子さんに会いたいな。
- C** 料金不足だったけど、きれいな絵葉書を送ってくれて「ありがとう」という気持ちを伝えたい。
- C** きれいな絵葉書だったからうれしかったけど、料金不足でがっかりしたから、他の人には料金不足にならないようにしてほしい。次は気をつけてね。
- T** 友達じゃなかったら伝えるかな。友達ってどんな存在なのかな。
- C** やさしい存在。
- C** 信頼できる。
- C** 友達って気が合わないと、友達じゃなくなるから大事にしたい。
- C** 仲がよいから話す。
- C** 一緒に鬼ごっこやゲームをしてくれる。
- C** 家族とはちょっと違う。同い年だし話が合うから会いたい存在。
- T** 「友情を深める」ということは、友達のことを大切に思っているからこそ、一緒に過ごして楽しいだけでなく、時には気をつけてほしいことをきちんと伝えられるということなんですね。

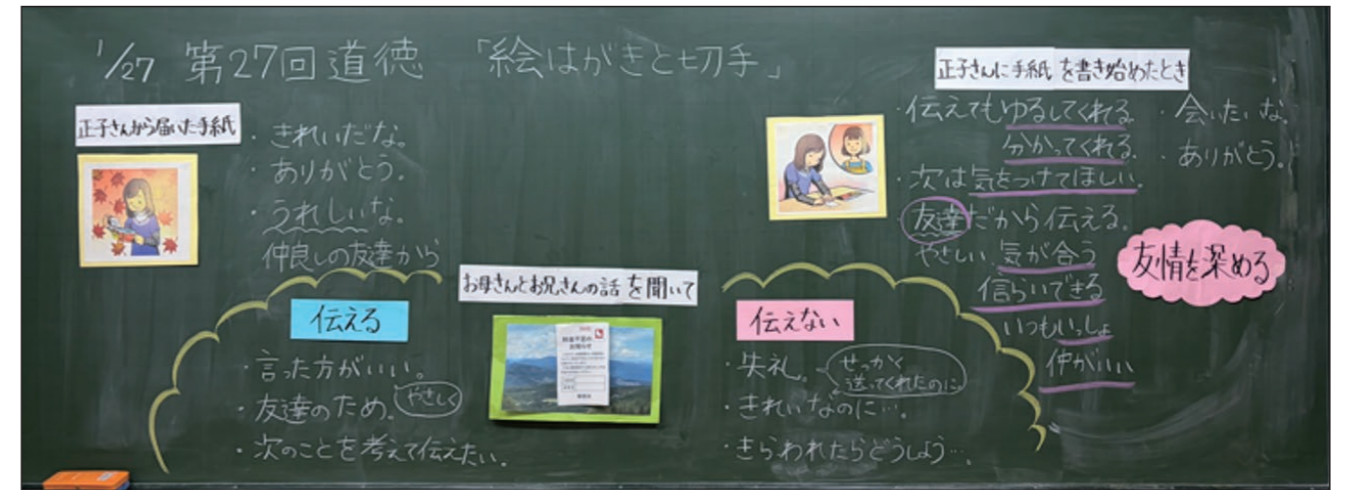
足立区立栗原小学校校長
山本 洋先生の



道徳科の授業構想は、教師が児童の実態を基に明確な意図（指導観）をもって臨むことが大切です。本時の主題は「友情を深める」ですが、友達を信用し、信頼し合って、「友情を深めるよさ」を児童に考えさせたいという教師の意図が分かります。いじめ問題が深刻化する昨今、友達と信頼し合ったり、過ちについて指摘（忠告）したりすることで、お互いを高め合うことは大変重要なことです。

中心発問は「友達を信用し、信頼し合って、友情を深めるよさ」を感じさせたいという教師の意図を反映して「ひろ子が正子に手紙を書く場面」に設定しています。「正子さんは（忠告の真意を）分かってくれる」という「信頼」の思いだけではなく、「思いやり」や「感謝」などの発言を児童から引き出すことで「友情を深めるよさ」について多面的・多角的に考えさせることができました。

学習活動 ◎→中心発問 ○→基本発問 ☆→予想される児童の反応	指導上の留意点
<p>導入</p> <p>1 学習問題に目を向ける。 ○友達がいってよかったと思ったのは、どんなときですか。 ☆相談に乗ってくれたとき。 ☆自分が転んでけがをしたときに助けてくれたとき。</p> <p>「友情を深める」とは、どういうことでしょうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらいとする道徳的価値について問題意識をもたせるために、アンケート結果や以前の学習から、学習問題に結び付ける。
<p>2 教材「絵はがきと切手」を読んで、話し合う。</p> <p>○正子さんから届いた手紙を見て、ひろ子はどんな気持ちだったでしょう。 ☆きれいな絵葉書だ。絵葉書をもらおうと嬉しいな。 ☆送ってくれてありがとう。 ☆料金不足のお知らせが貼ってある。</p> <p>○お母さんとお兄さんの話を聞いて、ひろ子はどんな気持ちだったでしょう。 【伝える】 ☆料金不足のことは言ったほうがいい。 ☆伝えるのは友達のため。 ☆次にやらないように伝えたほうがいい。 【伝えない】 ☆せっかく送ってくれたのに失礼になってしまう。 ☆きれいな絵葉書だからもったいない。 ☆友達に嫌われたらどうしよう。</p> <p>◎正子さんに手紙を書き始めたとき、ひろ子はどんな気持ちだったでしょう。 ☆友達だから分かってくれる。【友情】 ☆友達に会いたい。【友情】 ☆友達を信頼しているから伝えられる。【友情】 ☆友達だから教えてあげないと。【思いやり】 ☆ありがとうという気持ちを伝えたい。【感謝】 ☆次は失敗しないように気をつけてほしい。【思いやり】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物に自我関与させて考えさせるために、スライドを用いた読み聞かせで教材提示をする。また、物語の世界に入り込みやすくするために、BGMを流しながら教材提示を行う。 ・友達から手紙が届いてうれしい思いと、状況に対して困惑する思いが混在しているときの気持ちを、自分との関わりで考えられるようにする。 ・友達に伝えたほうがよいか、伝えないほうがよいか、友達を信じるときの難しさについて、人間理解を深められるようにする。 ・道徳的価値の理解を深めるために、葛藤する2つの自我を設定し、役割演技をした後、話し合いを行う。 ・友達を信用し、信頼し合って、友情を深めるよさについて、多面的・多角的に考えられるようにする。
<p>3 自己を見つめる。 ○今までに、友情を深めたと感じたことはありますか。そのとき、どんな気持ちでしたか。 ☆友達同士がけんかしているときに止められた。その時、止めることができたからもっと仲良くなれた。 ☆むかついていたときに「どうしたの。」と声を掛けてくれた。その時、うれしいし、頼もしい存在だなと思った。 ☆好きなものが一緒に気が合うから、一緒にいると楽しい。好きなことをたくさん話せるからお互い楽しい。 ☆お泊まり会をしたときに、改めて友達の存在に感謝したり、親友になったと感じたりした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達を信用し、信頼し合って、友情を深めるよさについて、これまでの経験から考えさせ、自己理解を深める。 ・これまでの自分の経験からねらいとする道徳的価値を振り返るために、ICTを用いた書く活動を取り入れる。共有機能を使ってお互いの意見を交流できるようにする。
<p>終末</p> <p>4 教師の話をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師自身が友情を深めるよさを感じた経験を話し、これからの生き方につなげられるようにする。



(5) 振り返りの場面

学習問題を中心に、「友情、信頼」の価値理解を深めたことを基に、ねらいとする道徳的価値に関する生活経験とそのときの感じ方、考え方を振り返る学習を行った。これまでの経験から自己を見つめる発問「今までに、友情を深めたと感じたことはありますか。その時、どんな気持ちでしたか。」を問い、ICTを用いた書く活動を通して、自分なりに考えた価値理解を言語化し、自己理解につなげられるようにした。

今までに、友情を深めたと感じたことはありますか。

- ・身近なこと（遊びや話など）でもきずなが深まったと感じている。
- ・登下校のときも「友達」という感じが強まる。

その時、どんな気持ちでしたか。

- ・きずなが深まってうれしかった。

(6) 終末の場面

終末では、教師が信用、信頼し合っている友達とは、何年経ってもよりよい友達関係を築いている経験を話した。何回も説話を聞く活動を積み重ねてきているので、児童も興味をもって話を聞く姿が見られた。

足立区立栗原小学校校長

山本 洋先生

ここに
フォーカス!



自己を見つめる場面では、児童が自分の生活を振り返り、「友情を深めるよさ」について考える活動を行っています。その中で「きずなが深まった」という児童の発言などから、双方向の友情について十分に考えている様子がよく分かります。杉山先生も授業後に考察されているとおり、「信頼し合う」「信用し合う」というキーワードが児童の発言や記述に見られた際に教師が適切に掘り下げることができると、「友情を深めるよさ」についての児童の考えがさらに深まったでしょう。

終末では、教師が明確な意図に基づいた説話をを行っています。「説話は難しい」と敬遠されがちですが、児童の生き方のモデルとなる教師が自身の成功体験を話すことでねらいとする道徳的価値に係る児童の問題意識や実践意欲が高まる効果があります。毎回の授業で積極的に挑戦してほしいです。

4 終わりに

本実践では、「友達を信用し、信頼し合って、友情を深めるよさを考えさせたい」と、教師の指導の意図を明確にしたうえで授業を行った。教材を基にした話し合いで児童から、「友達は信頼できる存在」という意見を引き出すことができた。また、小さなつづやきの中には、「信頼し合う」という意見もあった。これらの意見を適切に取り上げれば、「より信頼し合うよさ」について考えを深めることができたと言える。

また、振り返りの記述では、「友達と互いに信頼し合えたときに友情が深まった」という記述があった。この意見を全体で共有し、互いに信頼することの大切さを深めることができれば、より友情を深めるよさを実感することができたのではないかと考える。そのためには、学級全体で話し合う時間の確保が必要であった。教材を基にした話し合いに重点を置きがちになるが、ねらいとする道徳的価値を視点に児童が自分の現在の状況を振り返る時間も必要である。児童一人ひとりが問題意識をもち、自分との関わりで主体的に学習に取り組めるような授業づくりこそが、児童の道徳性を養うことにつながると考える。

実践事例

中学校
1年

「違いの価値」を見つめ、 多様性を磨き合う授業づくり

京都府向日市立勝山中学校 教諭 岩崎 佳子



教材名 違いを乗り越えて

内容項目 C「国際理解、国際貢献」

主題名 他国の人と接する

ねらい お互いの文化や習慣などを学び合い、尊重しようとする気持ちが根底にあることで、他国の人と通じ合う関係が築けることの自覚を通して、主体的に国際理解を深めようとする実践意欲を高める。

教材あらすじ 主人公の「私」の家に、インドネシアからAさんがホームステイにやって来た。2人は生活習慣やマナーの違いからすれ違いを感じていたが、私の母とAさんとのやり取りから、互いの文化や習慣を尊重し合い、通じ合う関係を築き始める。

1 はじめに

本校のある向日市は、京都市の南に隣接し、784年に平城京から遷都された長岡京の中心地として栄えた歴史あるところです。本校の近くには、本殿が国の重要文化財に指定されている向日神社や長岡京の政治・文化の中心であった大極殿跡や朝堂院跡が公園として整備されています。

ここは、旅行者であふれる京都とは違うイメージかもしれませんが、歴史の息遣いを感じられる地域にある中学校です。

また、郷土愛の強い生徒が多く、生徒から地域のことを教わる機会が多々あります。

授業では、どの教科でも話し合い活動が積極的に行



われています。また、作文などの創作的な活動にも主体的に取り組む生徒の姿も多くみられます。

道徳科の授業は、「コの字型」の座席配置で行っています。互いの顔を見ながら話し合えることや普段とは異なる座席に新鮮さを感じる生徒もいるようです。

2 コミュニケーションを通して育んできた実践

新生活への期待と共に、少なからず不安を抱えて入学する生徒は、どの学校にもいるものです。

道徳科の授業で発言する際、「間違っていたらどう思われるだろう。」「自分が変だと思われたくない。」という気持ちにとらわれ、発言することや話し合いに消極的な態度をとる生徒もみられます。コミュニケーション能力は、仲間と共に日々の対話を積み重ね、考えを深め合う中で育まれるスキルです。そうした中で、「自分はどうかありたいのか、どんな人間なのか」と自らに問いかけながら、豊かな道徳性を養ってほしいと思っています。コミュニケーションを避けるのではなく、互いの「違い」や「強さ・弱さ」を受け止めること。そして、対話を通じて「自分とはどのような人間か」を少しずつ考えること。そんな道徳科の授業でありたいと願い、毎時の学習を積み重ねてきました。

また、「コの字型」の座席配置の効果からか、友達の発言にうなずきながら聞いている生徒も多く、誰もが安心して発言できる雰囲気醸成されていました。

私が道徳科の授業で大事にしていることは、以下の内容です。

- ① 友達と同じ意見でもいい。自分の言葉で発信しよう。
- ② あなたの考えが他の人と違うことは◎。なぜそう考えたのか、理由を添えて伝えよう。
- ③ 友達が言った言葉で印象的な言葉は、誰が言ったかも大事にしよう。(記録しよう。)
- ④ 分からなくても○。人の意見をよく聞いてみよう。

①については、将来、外国で活躍したり、多様な背景をもつ人々と生活したりする生徒もいるでしょう。

だからこそ、生徒には自らの考えを発信する力を身につけてほしいと思っています。

②については、クリティカルシンキング（批判的思考）を大切にしてほしいと思っています。「本当にそうなのかな。」「それでいいのかな。」と疑問をもち、勇気をもって言葉にすることで、周囲を巻き込んでいける人であってほしいからです。

③については、どのクラスにも、例えば「他者に寛容で思いやりがある」生徒がいます。そうした生徒の言葉や考え方は、これまでの経験に根ざした道徳的価値観に支えられており、他の生徒の共感を得ることが多くあります。実際、他の生徒がその発言に大きくうなずいたり、反応したりする場面がよくみられました。

そこで、自分が共感した友達の言葉や考え方を積極的に取り入れるよう促したところ、自分の言葉として使う姿が多くみられました。また、共感した友達の言葉や考え方を、発言した友達の名前とともに自分のノートに書き残す生徒の姿を多く目にしました。

④については、考えていることはあるが、言語化が難しい生徒も引け目を感じず授業に参加してほしいという思いがあります。だからこそ、人の意見をよく聞くことがとても大事だと伝えてきました。

道徳科の授業については1年生を担当する教師らが授業前に授業の進め方を議論し、授業後には生徒の発言や反応、課題を共有しながら振り返りを行っています。各教師が自分の持ち味を生かしつつ、日常的に道徳科の授業を話題にできたことは大きな収穫でした。

教科の話題になると、どうしても「教科内容を理解できているか」という視点に偏りがちです。しかし、道徳科の授業での生徒の発言や反応を教師同士で交流したり、道徳ノートをみんなで見返したりすることで、生徒理解をより深めることができました。教師として、自らの授業の改善点に向き合い、試行錯誤を繰り返しながら、真摯に授業に取り組んでいます。

3 ねらいとする価値について

情報社会の中で外国とのつながりが当たり前になっている生徒にとって、今回のテーマはまさに自分ごととして考えたい課題のようでした。生徒は日頃からSNSを通じて外国とつながったり、外国の動画に興味を示したりしています。また、社会科や外国語科で外国との関わりについて学んで理解しているつもりでも、実際にはまだ分からないことが多いという自覚もあります。そのため、国際理解や国際親善について道徳科の授業で考え合うことは、生徒にとって自分の認識を見直し、理解を深める貴重な機会となりました。

4 道徳科の授業での工夫と実際の生徒の様子

本校には、さまざまな文化的背景をもつ生徒が在籍しています。生徒からは、町や電車でAさんのイラストにあるようなヒジャブを着用した女性を見かけた経験があるという声もありました。

授業では、Aさんの母国語は英語ではないことや仏教やキリスト教以外の宗教を信仰していることを伝えながら進めました。資料を使って詳しく説明することもできますが、今回、大切にしたのは知識の量ではありません。どのような文化や信仰をもつ相手であっても、その人を尊重し、大切にしようとする姿勢について考えてほしいと思いました。



畿央大学大学院教授
島 恒生 先生の



中学生に限らず、最近の社会の風潮として、「間違っていたらどうしよう。」「みんなと違っていたらだめだ。」という意識と、逆に、自分に関係ないことへの無関心が強くあります。しかし、岩崎先生がおっしゃるように、道徳科は、みんなで考え、議論するなかで、互いの「違い」や「強さ・弱さ」を受け止め合い、一人ひとりが自分の生き方を見つめる時間です。生徒同士、あるいは生徒と教師が、さらには教師同士が、他者に関心を持ち、互いに影響し合い、成長できる場なのです。

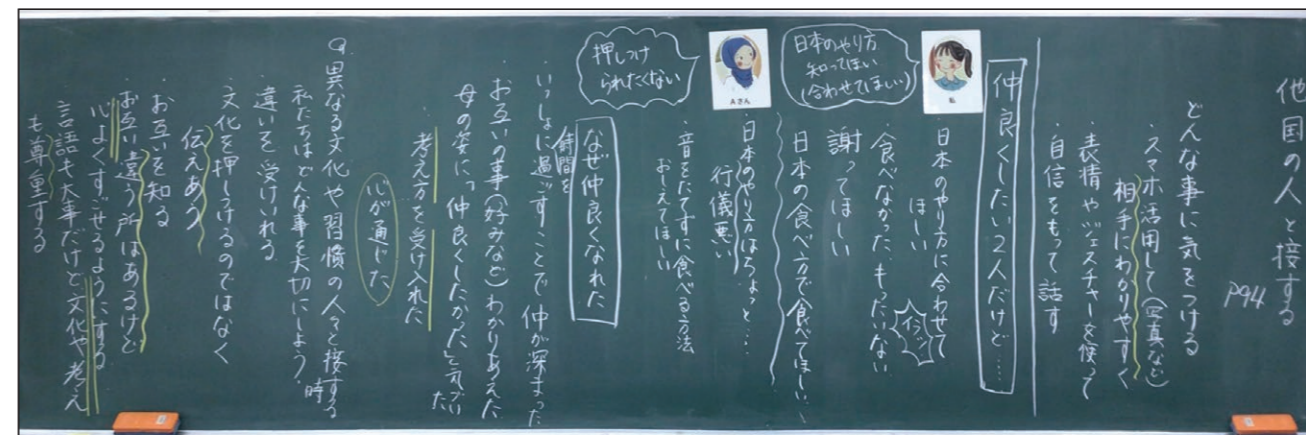
「コの字型」の座席配置、道徳科で大事にしている①～④のポイント、学年教師団での取り組みなど、どんどんみんなを巻き込み、みんなで創っていく工夫と楽しさがあふれています。次期学習指導要領の目指す「考え、議論する道徳の実装」は、このような集団が大前提にあるのではないのでしょうか。

学習活動	指導上の留意点
<p>◎→中心発問 ○→基本発問 ☆→予想される生徒の意識</p> <p>1 自分の体験や考えを話し合う。 ○他国の人と接するときどんなことに気をつけますか。 ☆スマートフォンで写真や地図を示して話す。 ☆ジェスチャーや視線で伝える。 ☆自信をもって話す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 公共交通機関を使ったり、家族で出かけたりした際、外国からの旅行者を目にすることが多い。そこで、道案内などの経験についての話も交えながら、ペアで自由に交流できるようにする。
<p>2 教材「違いを乗り越えて」を読み、話し合う。 ○他国の人と接するときどんなことが大切だろう。</p> <p>○「私」がすっきりしない気持ちになったのはなぜだろう。 ☆日本のやり方に合わせてほしい。 ☆せっかくだと連れてきてあげたのに。</p> <p>(補助発問) Aさんはどのように思っただろう。 ☆日本の食べ方は行儀が悪い。 ☆(日本の文化を)押しつけられたくない。</p> <p>○けんかしてしまったけど……なぜ仲良くなれたのだろう。 ☆一緒に過ごしてお互いの考えを受け入れた。 ☆お互いをより分かり合えた。 ☆(母とAさんの姿を見て)言葉だけではないコミュニケーションがあった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 今日考えたいことを板書し、生徒に意識をさせる。 1分程度、個人で考えた後、ペアで話し合い、その後、4人程度で話し合う形態をとる。 生徒が自分ごととして考えやすい「私」を主語にしてまずは考えることができるようにする。 Aさんの立場で話を始める生徒がいる場合は、補助発問を行う。 「私」対Aさんという対立にならないように、それぞれの立場で考えるよう助言する。 コミュニケーションによって人と人が分かり合えることに気づかせ、中心発問への問題意識を高める。
<p>◎異なる文化や習慣の人々と接するとき、私たちはどんなことを大切にしたらよいだろう。</p> <p>☆お互い違う部分はあるけど、気持ちよく過ごす。 ☆日本の文化を押しつけるのではなく、自分たちの文化を伝え合うことが大事。</p>	
<p>3 授業を通して考えたことから、今日の学習を振り返る。 ☆自分達の文化も相手の文化も尊重することが大切だ。 ☆相手の文化について、よく理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 世界情勢や国際問題について触れ、国や地域によって考え方が違ってこれからもお互い尊重し合い、協力し合うことの大切さを確認する。 本時の学習を通して考えたことを道徳ノートにまとめさせる。

導入

展開

終末



5 「違いを乗り越える」って何だろう

仲たがいしていた2人が再び仲良くなった理由について、「2人が仲直りできた理由は何か」を生徒に問いかけました。生徒からは、自分の態度を謝ったり、しきたりなどを説明したりすることも大切だが、一緒に過ごして楽しむ時間が心を通わせるのではないか、という意見がいくつも出ました。そして、その考えに多くの生徒が共感していました。

また、「言葉が違って、外国の人と仲良くなるというのは、こういうことなのかもしれない。」と考える姿もみられました。

生徒の中には、入学当初はクラスメイトを「同じ仲間」と捉え、関係づくりに前向きだった人もいます。しかし、学校生活に慣れるにつれ、あるいは自分に余裕がなくなるにつれ、関係づくりよりも自分の考えを優先してしまう場面もあったのかもしれない。

授業の最後に「『違いを乗り越える』ってどんな意味だろう。」と少し立ち止まって考えることにしました。

「違い」をマイナスにとらえるのではなく、「違い」をプラスに捉え、寛容の心をもって豊かな価値を見いだすこと、そして生徒自身が「何ができるのか」を考えられる時間になっていけばと締めくくりました。

○「私」はAさんにいろんなことを気づかされたのだと思う。自分を見直したことで、日本の文化を押しつけるのではなく、相手の文化も自分の文化も大事にすることができたのだと思う。お互いの国を優劣つけずに、その違いを理解して受け入れることを大切にしたいと思いました。

○まずは自分の国のことをよく知ることが大事だと思います。そして日本文化を楽しみ、楽しませようとする心が大事だと思います。

○世界では文化の違いや人種の違いでけんかになるという事件が多いから、Aさんと「私」のようにお互いを理解しようとする気持ちが大切だと学びました。

○他国と関わるときだけでなく、相手と自分が違うところを受け入れていくことによって仲が深まるんだと思いました。

6 終わりに

学期末に印象的だった授業や感想を生徒に書いてもらっています。生徒が考えたことや感じたことを受け止め、豊かな心を育てていきたいと思っています。

畿央大学大学院教授
島 恒生 先生の



国際理解は、まさに「違い」についての考え方が問われる場面です。国や地域同士が、違いは認めるものの、無関心であってはならないのです。当然、違いが対立になってもいけないのです。では、「違い」をどのように考えたらよいのでしょうか。それを考え、議論するための問いが、「2人が仲直りできた理由は何か」です。それを考えたうえで、中心発問を考えることとなります。岩崎先生は、「違い」をマイナスに捉えるのではなく、プラスに捉えるという発想を、生徒たちと考えようとしています。「違い」を受け入れ、学び合うことが豊かな世界の実現に近づくのです。

さらに、本授業の学びを、国際理解にとどめることなく、人と人のつきあい方や学級での人間関係を視野に入れながら進めていることも、とても大事なポイントです。

おさえておきたい!

授業力アップのための教科書・指導書活用術

小学校編

指導書を活用した道徳科の授業づくり — 指導書を「なぞる」から「使いこなす」へ —

奈良県王寺町立王寺南義務教育学校教諭 山田 沙季



「**「分かりきったこと」**で終わらせないために

道徳科の授業準備で指導書を開くとき、皆さんはまずどこを確認されるでしょうか。きっと多くの先生が、「学習指導過程」のページを確認されるのではないかと思います。特に若手の先生方は、「導入でこう問いかけ、展開でこの発問をし、終末でこんな話をしよう…」と本時の展開をイメージするものの、「展開例をなぞることで精いっぱいになってしまう」「子どもが『分かりきったこと』を言うだけの授業になってしまう」という悩みをよく聞きます。私自身も「どうすれば、子どもに『分かりきったこと』を言わせたり、書かせたりするだけの授業にならずに済むのだろう」と自問自答する日々です。

道徳科の授業を子どもにとってより深い学びの時間にするためには、指導書を本時の流れをなぞる資料で終わらせてしまうのはもったいないことです。指導書を参考に内容項目を発達の段階ごとに見直し、「今、目の前にいるこの学年の子どもだからこそ一緒に考えたいこと」をはっきりとさせてみませんか。特に内容項目の発達の段階の違いを意識することで、授業のねらいや発問の意図がぐっと明確になり、深い学びが得られる授業へとつながっていくはずですよ。

発達の段階の違いを意識し、キーワードからねらいや発問を考えよう!

授業づくりの第一歩として、私は指導書（研究編）に書かれている「内容項目のキーワード」に注目することをおすすめしています。これは、内容項目を子

も向けの言葉で表したもので、教科書の各教材の冒頭ページにも掲載されています。

例えば、5年生の「うばわれた自由」を扱う際、「内容項目を発達段階ごとに見通そう」というページを開き、低学年の「よいこととわるいこと」や中学年の「正しいと思ったことを」というキーワードとの違いを比較します。すると、「自由だからこそ自分に責任が伴う」という高学年で目指すべき内容が見えてきます。さらに高学年ですから、中学校の「自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。」という内容項目も意識したいです。こうして、中学校までを見通した「価値の深まり」を捉え、そこに子どもの実態を重ね合わせることで、より具体的な授業のねらいが定まってきます。

ねらいが決まれば、次は発問です。私は、指導書の「学習指導過程」にある発問例を参考に「この発問だと、子どもはどう答えるだろう。」と子どもの言葉で具体的な反応を考えることを意識しています。事前に子どもの反応を予想し、さらに発達の段階ごとのキーワードやポイントを押さえておくことは、授業中の発言から学びを深める意見を見つけ、立ち止まるための指標にもなります。もちろん、内容項目の見方は「これではないといけない」というものではありません。内容の解釈には多様な見方が大切です。以上のように、指導書を使いこなす、各内容項目や発達の段階ごとのポイントを手がかりに、授業づくりを行うことが、子どもの深い学びの実現へとつながります。

内容項目を発達段階ごとに見通そう			
A 善悪の判断、自律、自由と責任 (中学校では「自主、自律、自由と責任」)			
第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年	中学校
よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行うこと。	正しいと判断したことは、自信をもって行うこと。	自由を大切にし、自律的に判断し、責任のある行動をすること。	自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。
キーワード「よいこととわるいこと」	キーワード「正しいと思ったことを」	キーワード「自由と責任」	ここに注目!
〔掲載教材（主題名）〕 (1年) 「5 なにをしているのかな」 「よいこととわるいこと」 「21 にんじんばなだけで」（だめなことはだめだよ） 「28 やめろよ」（正しいとおもうことを） (2年) 「4 ばんたど かんた」（自分で きめる） 「19 わりこみ」（してはいけないこと） 「30 ある日のくつばこで」（ゆう気を 出して）	〔掲載教材（主題名）〕 (3年) 「8 あこがれの人」（弱心に負けない） 「19 たからさがし」（やっばり、やめよう） 「32 ダブルブックンギン」（正しいと考えたことを） (4年) 「5 さち子のえがお」（きっぱりことわる） 「18 遠足の朝」（勇気をもって） 「32 よわむし太郎」（正しいと思ったことは自信をもって）	〔掲載教材（主題名）〕 (5年) 「11 ばくたちの夏休み自由研究」（責任を果たす） 「25 うばわれた自由」（自由とは） (6年) 「2 はんとうのことだけど……」（自由と責任） 「23 自由行動」（自由の難しさ）	【キーワードとは】 該当する指導内容項目を児童向けの言葉で表したものです。教科書には、巻頭の「道徳のとびら」（1・2年を除く）および、各教材の冒頭に掲載しています。 (ここでは、それぞれに上学年の表記で統一しています)

〔小学道徳 生きる力5 教師用指導書 研究編〕 p.176-177 「内容項目を発達段階ごとに見通そう」



地球の仲間からのメッセージ

想定外の羽化

獣医師、第16代天王寺動物園長
長瀬 健二郎

暖かくなり、水もぬるみ始める頃、毎年必ず思い出すことがあります。

私は神戸で生まれ育ち、結婚後は隣の市で暮らしています。その間、阪神・淡路大震災も経験しましたが、住んでいた集合住宅は後に「半壊」と判定されましたが、幸運なことに被災直後は電気が通じていたので、暖をとることができました。しかし、断水状態で大変不便な思いをしました。飲み水は、給水に来てくれた自衛隊のおかげでなんとかなりりましたが、トイレを流すための水の確保が最大の難点でした。途方に暮れて、どうしたものかと窓の外をぼんやり眺めていたとき、ふと気づきました。家の向かいには、娘が通っていた小学校があり、そのプールが集合住宅の階段を下りた目と鼻の先にあったのです。そこで家にあった10L入りのポリタンク2個でプールの水を我が家のバスタブへ運ぶことにしました。エレベーターは止まっています。住んでいる7階まで階段で何往復もして水を運ぶのはかなりの重労働でした。でも、満水になったバスタブを見て、これでなんとか自宅で暮らし続けることができるめどがついた、と心の底から



ほっとしたことを今でもよく覚えています。しかし、その2日後、事態は一変しました。

風呂場からキャーともギャーともつかない金切り声が聞こえてきたのです。慌てて駆けつけると、妻が風呂場の前で座り込んでいました。彼女が恐怖の目で見つめる先の風呂場には、数mmから1cmくらいの小さな虫が数えきれないほど飛び回っていたのです。トイレの貯水タンクにバスタブの水を入れようと風呂場の扉を開けたところ、この光景で、虫恐怖症の妻は思わず金切り声を発して座り込んでしまっていたのです。

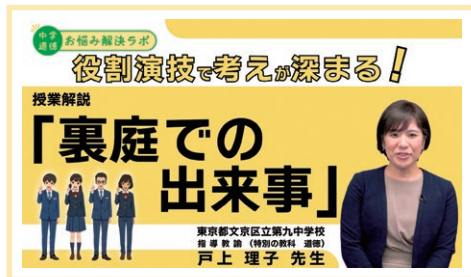
夏が終わって使われなくなったプールは虫たちにとって子孫を残すための格好の「卵のゆりかご」です。翌年へ命をつなぐ場としてさまざまな種類の虫が産卵していたのです。地震がなければ、春になって水温が上がるまで卵は守られ、その後には羽化し、次世代の子虫が活動を始めていたはずですよ。しかし、非常事態が発生し、我が家のバスタブへと運ばれたプールの水は想定よりも2か月ほど早く水温が上昇したため、羽化してしまったのです。鳥などはいくら早くても卵のふ化まで10日あまりかかりますが、小さな虫は長くても3日もあれば羽化します。このことをすっかり失念していたのです。ゴキブリはおろかコバエなどにも耐性のない妻をこの環境に置くことはできません。私は、慌てて仮住まいを探し、転居しました。この時節を迎えるたびに思い出す辛い地震の記憶です。



授業解説動画公開のご案内



東京都文京区立第九中学校 指導教諭 (特別の教科 道徳) 戸上 理子先生による
授業解説動画「**二通の手紙**」「**裏庭での出来事**」を公開しました。
明日からの道徳授業の参考として、ぜひ、ご視聴ください!



※本動画は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、制作したものです。

「中学道徳 お悩み解決ラボ」シリーズの動画は、日文Webサイト、YouTube「日文チャンネル」で公開中!!

日文Webサイト
「中学道徳お悩み解決ラボ」
シリーズ

動画
公開中



YouTube
「日文チャンネル」

動画
公開中



日文公式 Instagram を開設しました!

日々の授業でご活用いただける情報や教育現場でのヒントとなる情報、弊社のWebサイトの更新情報などを発信していきます。ぜひフォローをよろしくお願いいたします。
投稿への「いいね!」やシェアも、心よりお待ちしております。

中学道徳 教授用資料のご案内

道徳科の不安や分からなさは「指導書」で解決!!

『令和7年度版 中学道徳指導書活用 私の提案』
兵庫県佐用町立佐用中学校 教頭 伊勢 幸弘 (執筆当時)

どうとく? 先生! 2 マンガで考える道徳教育

最新話(第5回) 絶賛公開中!

どうとくのひろば

本誌に関するお問い合わせ

読者アンケート

どうとくのひろば No. 43

日文教育資料 [道徳]
令和 8 年 (2026 年) 5 月 15 日 発行

編集・発行人 佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL: 06-6692-1261
FAX: 06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD3444140430

日本文教出版株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL: 06-6692-1261 FAX: 06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16
TEL: 03-3389-4611 FAX: 03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14
TEL: 092-531-7696 FAX: 092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18 7F-B
TEL: 052-979-7260 FAX: 052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1
TEL: 011-764-1201 FAX: 011-764-0690